

南三陸町での被災地復興フィールドワークを通じて、 学生が「超高齢化社会」におけるまちづくりを提案

横浜市立大学の「地域まちづくり実習^{*}」では、東日本大震災後 6 年半を経過した宮城県南三陸町の現地調査と地域活性化に取り組む被災地復興フィールドワークを実施し、その成果を「超高齢化社会のまちづくり」に生かすことを目的に、10 月 6 日（金）に成果発表会を開催します。

学生たちは、9 月 7 日（木）～12 日（火）の 6 日間を南三陸町で過ごし、3 班に分かれてそれぞれ違う視点で被災地における地域課題解決の方策を探りました。当日は、学生が班ごとに成果報告を行い、本学教員により講評・審査を行います。

※「地域まちづくり実習」…国際総合科学部国際都市学系まちづくりコース開講科目
(担当教員：准教授石川永子、准教授三輪律江)

<概要>

日時：平成 29 年 10 月 6 日（金）14：30～16：00

場所：金沢八景キャンパス 文科系研究棟 1 F 大会議室

<プログラム> (予定)

- | | | |
|-------|----------------------------|-----------|
| 14：30 | 地域まちづくり実習 概要説明・全体報告（15分） | 担当教員：石川永子 |
| 14：45 | 成果報告（60分） | |
| | 福祉モール班1「庭から始まる新たな人生」 | |
| | 福祉モール班2「志津川 ささえあいプラン」 | |
| | 中心市街地活性化班「南三共育～循環から学ぶ南三陸～」 | |
| 15：45 | まとめ 担当教員：三輪律江（5分） | |
| 15：50 | 表彰、全体講評、閉会あいさつ | |

この科目は、平成 25 年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」^{*1}として採択された事業の一環として実施しているアクティブ・ラーニング推進プログラム^{*2}の科目であり、大学の教育改革につながる取組のひとつです。

※1 文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（大学COC事業）」

自治体等と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援することで、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成を目指す文部科学省の事業。

<http://www.yokohama-cu.ac.jp/ytog/contribution/coc/index.html>

※2 アクティブ・ラーニング推進プログラム

大学COC事業の中で、地域課題解決を目指した地域展開型アクティブ・ラーニングに取り組む科目を推進。

取組み件数（平成 26 年度 2 件、平成 27 年度 6 件、平成 28 年度 9 件、平成 29 年度 10 件）

http://www.yokohama-cu.ac.jp/ytog/contribution/education/active_learning/index.html

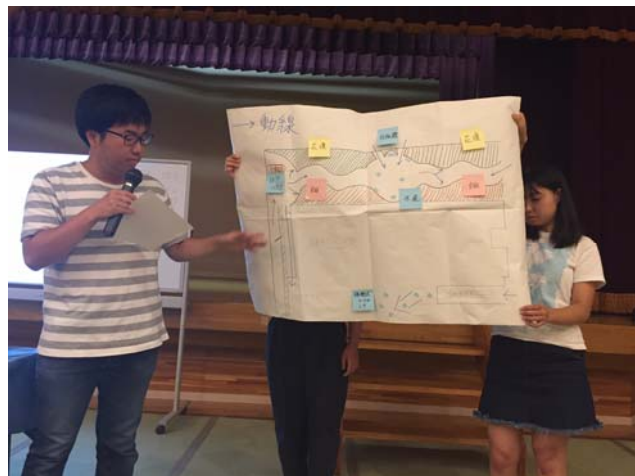
<参考>

「地域まちづくり実習」3班の取組

福祉モール班1「庭から始まる新たな人生」

9月に着工した福祉モール*の外構部分や周辺の通路や芝生部分といったところも含めて、施設と一体利用を考える提案。通常、集会施設等に來ることの少ない、男性の高齢者が目的を持って來場するようなしなかけを考え、施設利用者の多様化がねらい。具体的には、クラインガルテンを参考にして、敷地内に、畑作業やDIYを行うための小さな木小屋等を設置し、その周辺での自発的な活動が生まれるしなかけをつくる。

これらの工夫は、南三陸町に限らず、福祉・集会スペースの多様な市民の利用を促進するための工夫としてもとらえることができる。



※福祉モール…「(仮称) 地域ささえあいモール」 志津川東地区に建設中で、子どもから高齢者まで、町民すべてが気軽に集いふれあえる、福祉と交流の拠点となることを目指している。施設内には、交流ラウンジ・カフェや高齢者デイサービス、見守り・ボランティア拠点などの機能を検討中。

福祉モール班2「志津川 ささえあいプラン」

町内のさまざまな地区から集まってきた志津川の公営住宅に住む高齢者が、より健康的でより充実した生活を送るための仕組みづくりを検討した。団地の棟ごとに空き家を活用して、ふらっと集える場をつくり、自治会が主体の棟ごとの地域の集い空間を計画した。

これらのコミュニティスペースでは、横浜市金沢区の「UDCN 並木ラボ」を参考にし、お茶会や健康保健室を行えるようにし、安否確認の機能も持たせる。



中心市街地活性化班「南三共育 ～循環から学ぶ南三陸～」

來町者に、南三陸町の特徴でもある自然の循環とそれによりもたらされる恩恵を学んでもらうための、町内に点在する地域施設等のネットワーク化と見える化、窓口となる施設の計画を行った。自然の循環を、職業体験を通して、見て・触れて・学ぶ「南三共育」を目指す。

また、震災後の復興街づくりでは、子どもがふらっと立ち寄り・寄り道ができる場所が少ないので、良い意味での溜まり場となるような場を検討した。

